

第一次大極殿復原模型(1/10)の設計

平城宮跡発掘調査部・建造物研究室

1993年度は、100分の1スケールで第一次大極殿院全体の模型を製作したが、1994年度は、大極殿本体の10分の1スケールの模型を設計した。まず、1994年7月6日および8月5日の2度にわたり、坪井清足、伊藤延男、岡田英男、濱島正士の4氏を委員とする平城宮跡復原建物設計専門委員会を開催し、1/10大極殿模型設計の基本方針について議論した。完成した1/100模型をたたき台としつつ、大極殿本体の意匠・構造の再検討をおこなったのである。この2回の専門委員会では、とくに大極殿上層(2階)のヴォリュームと意匠に論点が集中した。復原朱雀門や大極殿院閤門の立面と比較すればあきらかだが、1/100大極殿模型の上層は、初層に対してずいぶん小さくみえる。また、開口部では、連子窓の占める面積が大きく、意匠が繊細すぎるため、全体として非常に窮屈な印象を与えている。この2点が委員会に出席した委員および所員のほぼ共通した感想であり、1/10模型の設計にあたっては、以下のような修正をくわえることになった。

①1/100大極殿模型では、上層を初層入側柱筋から1支(1尺)分だけ外にだし、桁行9間(12尺+13尺+14尺+15尺×3+14尺+13尺+12尺)、梁間3間(12尺+16尺+12尺)とした。1/10模型でも、桁行9間×梁間3間の上層平面は踏襲するが、隅柱をさらに1支分外にだして、上層全体のヴォリュームを、わずかではあるが、大きくする(これ以上大きくすると、構造上の問題が生じる)。

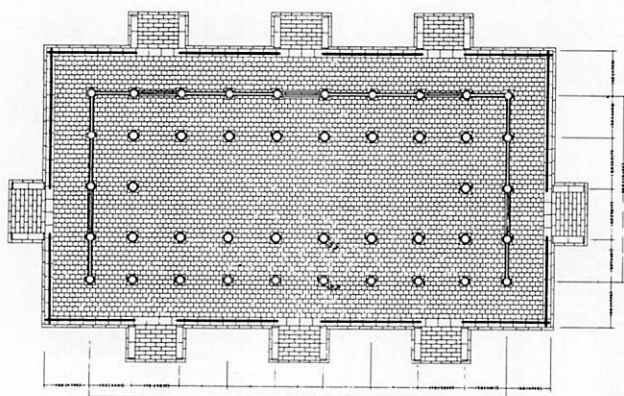


図1 第一次大極殿初層平面図(1:800)

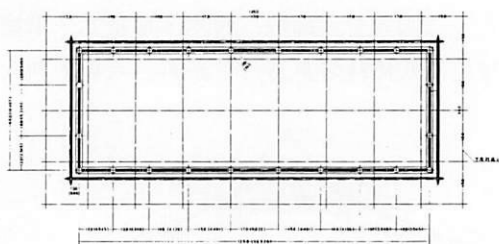


図2 第一次大極殿上層平面図(1:800)

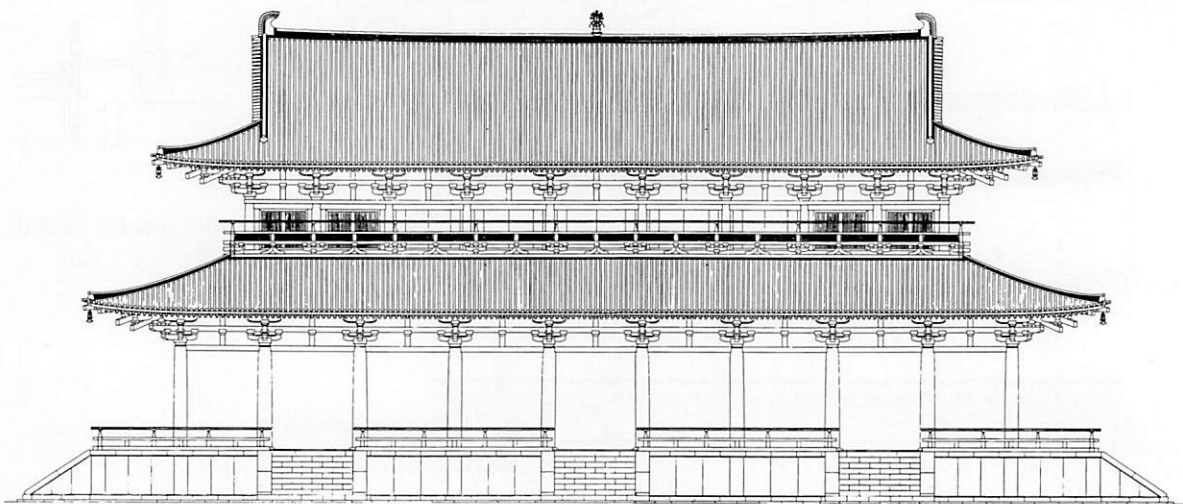


図3 第一次大極殿正面図(1:400)

②これにより、上層の平面は桁行・梁行とも総長が2尺ずつ増すわけだが、この変化には桁行・梁行いずれも中央間を2尺ひろくとることで対応する。すなわち、桁行の柱間は12尺+13尺+14尺+15尺+17尺+15尺+14尺+13尺+12尺、梁行の柱間は12尺+18尺+12尺とする。

③1/100大極殿模型では上層正面開口部9間のうち、両端3間ずつの計6間を連子窓としているが、1/10模型では両端2間ずつの計4間のみを連子窓とし、他を開き戸とする。

以上の3点が、1/10大極殿模型設計にあたっての基本的な修正方針である。この方針に基づき、1/100大極殿模型の設計を担当した松田敏行氏に、ひきつづき1/10大極殿模型の設計を依頼した。その後、設計を進めるなかで、3度の復原設計小部会をひらき、鈴木嘉吉・岡田英男両氏の指導のもとに、細部の修正をくりかえし、1994年度末までにまとめたのが図示した設計案である。すでに模型の製作ははじまっているが、製作の過程において、さらに細部の微修正をはかり、1995年度末に模型は完成する予定である。なお、復原設計の基準寸法は、1/100大極殿院模型とおなじく、1尺=29.54cmとした。

(浅川滋男)

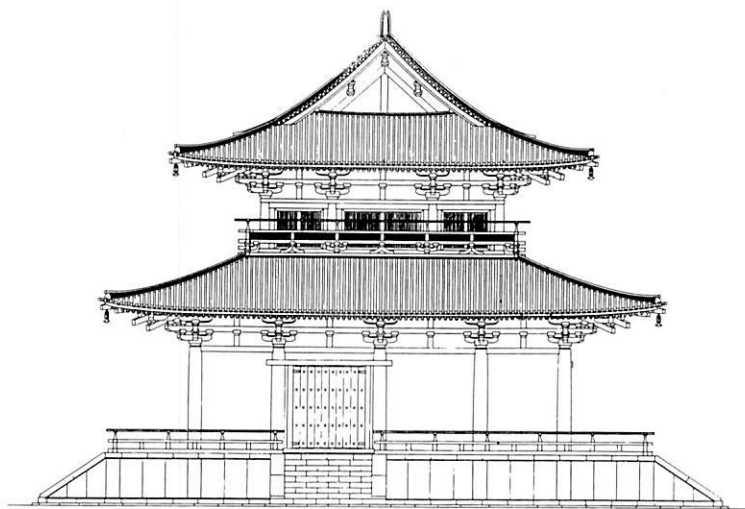


図4 第一次大極殿側面図 (1:400)

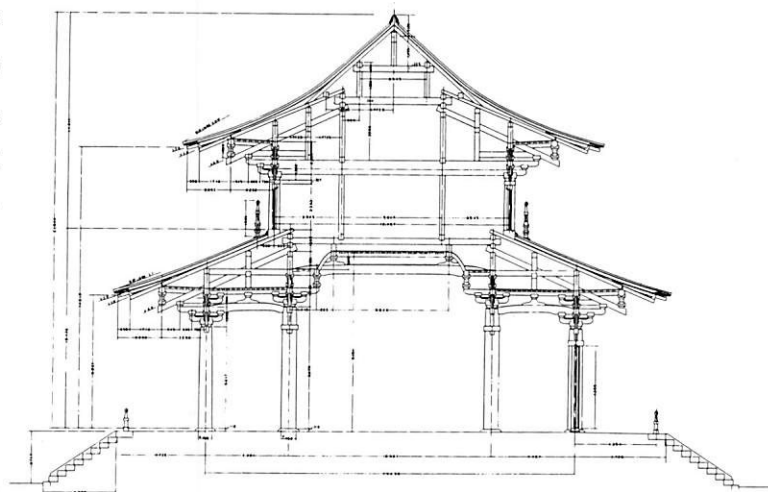


図5 第一次大極殿梁行断面図 (1:400)

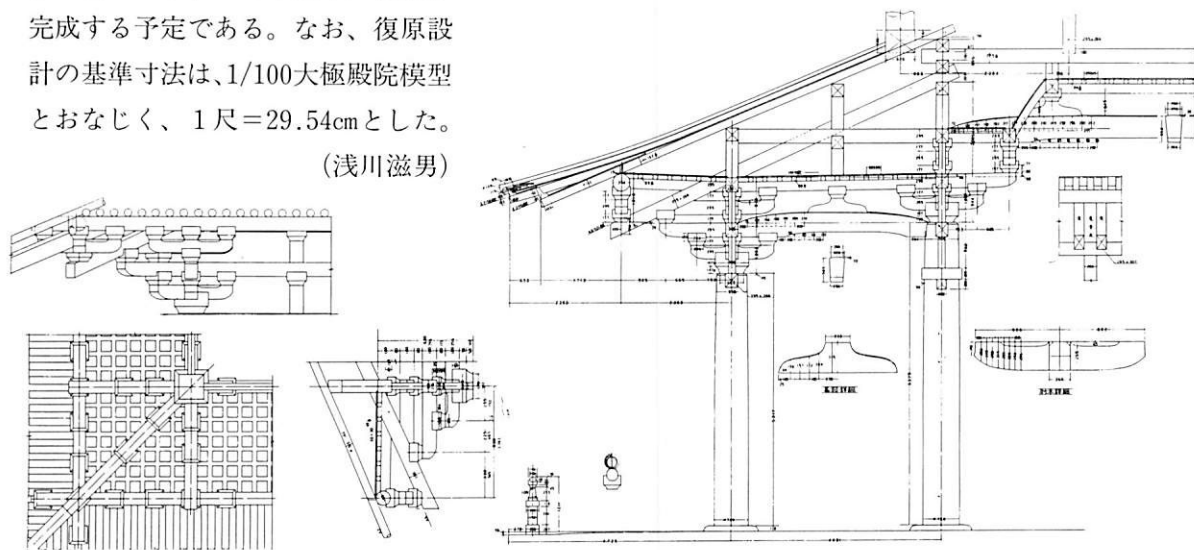


図6 第一次大極殿詳細図 (左:軒まわり、右:初層主要部) (1:160)